

小 さ き 声

No.149

1975.1.15

〒 189 東京都東村山市青葉町 4-1-10

多磨全生園 松本馨

神の言を喰う

1975年を迎えて、私が改革したいと思うことは、1日勤務の自治会業務を半日に切り換えることである。役員の老令化と不自由度の進行は1日勤務をゆるさない。何よりも私自身が、健康的に1日勤務に耐えられない。

昨年は会長という大任を負ったこともあって、聖書と祈りの時間が思うように取れず、縷々酷い疲労と呼吸難を経験した。私の身体は必要量の神の言を喰っていないければ健康は維持できないし、自治活動も出来ない。人は私の自治活動を評して政治が好きだからと言う。亦ある人は偏見と差別の戦いである患者運動に情熱を燃しているからだと言う。

然し信仰を離れて自治活動はないし、健康もない。今のようにテープレコーダーもなく、教友の協力で聖書の暗誦をしていた頃、それが私に残された唯一の勉強法であったが、時折神の言に飢えて呼吸難に陥った。

訪れる教友もなく終日壁に向っていると神の言に激しく飢え、呼吸難に陥り失神してしまうのである。当時と状況が違うこともあってその現

れ方も違うが、疲労と呼吸難に襲われるのである。こうしたことはこの世の人には全く理解出来ない事である。

けれども神の言を喰う喰わないは、私にとって死活に関わる大問題である。神の言を喰っていないければ自治活動は出来ないし、健康を維持する事も出来ない。

旧約のアブラハム、モーゼは、神に直接召された預言者で、神の言葉を喰って生きていた。カリスマ的指導者である。王国時代の王達は、預言者に依って油を注がれ、王位に就いた。油を注がれた王には神の霊が働き、民衆の指導者として偉大な力を発揮した。ダビデはその代表的人物である。

カリスマ的指導者として素朴な形で記されているのが、士師記のサムソンである。私は士師記は文学だと思うが、サムソンはイスラエルを救った偉大な指導者である。彼は敵を畏怖せしめる力を持っていたが、その力の秘密は生れた時から一度も頭に剃刀を当てなかったことにあった。これは旧約の素朴な信仰である。

新約ではイエス・キリストを信ずる信仰に依って表現されている。「わ

わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信ずる者はたとえ死んでも生きる（ヨハネによる福音書 11 の 25）。パウロもまたロマ書 1 章 17 節で言う「信仰に依る義人は生きる」。更に 8 章 26 節で言う。「御霊もまた同じように弱い私達を助けて下さる。何故なら、私達はどうか祈ったらよいかわからないが、御霊みずから言葉に現わせない切なるうめきをもって、私達のために取りなして下さるからである」。父なる神とイエスキリストを信ずる者に神の霊は働くのである。そして神の言と霊は一つなのである。新約では、信ずる者は皆、霊的力を与えられるカリスマ的指導者になることが出来るのである。「わたしは父にお願いしよう。そうすれば父は別に助け主を送って、いつまでもあなた方と共にあらせて下さるであろう。それは真理の御霊である（ヨハネによる福音書 14 の 16、17）。これはイエスの言であるが、ここで言われている助け主は御霊である。そして信ずる者には、この霊が働くのである。

神の言を喰うとは、霊的力を送ることである。そしてこの力なしには自治活動はできない。改革とは神の言を喰い霊的力を送るため、それ以外のことはどうでもよいことである。改革できるか出来ないかは、私の自治活動が終るか終らないかを意味する。このことは私にとって何をにおいても実行しなければならない

5 年の使命である。

愛

今年はまだ私には、もう一つの果さなければならぬ使命がある。それは日本列島の最南端に居る宮古島の教友を訪問することである。

ハンセン病の世界で限られた少数の信仰の友が南静園で戦いを進めている。その教友を激励し、信仰の交りを深めるためである。この訪問旅行には鹿児島星塚敬愛園の教友も同行することになっており、楽しい旅となるであろう。自治活動という神なきこの世界に私が受ける最大の恩恵である。

或る友へ

12月13日

昨夜は眠りについて間もなく、うなされ、夢の中で助けを求める自分の叫びに目を覚ましました。それから夜明けまで一睡も出来ませんでした。あなたは私のこの言葉に驚かされるでしょう。主イエスの死と生に会わされ、罪と死から解放された者にとっては考えられないことだからです。事実、私自身自分の身に起った事は信じられない位です。

あなたは多磨全生園の整備予算が治療棟 8 千万円、第 1 センター（不度、特、重、中の人達）個室 10 床、独身軽症寮個室 10 床がついた

ことをご存じでしょう。治療棟は、センターとして2カ年で完成する予定です。

自治会を再建したのは、1969年ですが、その時以来本省に向けて、センターの必要性を訴え続けて来ました。ハンセン病は終焉に近づいており、センターを造ることは、現実無視の如く思われますが、私は療養所を開く時より収拾する時の方が、難しいと判断しています。先の見えた医療に医者や看護婦は魅力を感じないし、一般の関心も薄く、忘れられてしまいます。そういう状況の中で、最後に生きる人達は、医学的治療を受けることが出来ず、犠牲になってしまいます。私にはそのような世界が見えており、それなればこそ何処かの施設が医療の責任を負わねばなりません。そして、それは地理的にも、医療の面でも、多磨全生園以外にないと判断しました。私の思った通り5年後の今日、全国ハンセン病療養所は、深刻な医療危機に襲われています。今の時をおいて、センターを作る機会を外にないでしょう。私はまたこのセンターに、一つの願いをかけました。

東南アジアには、幾百万とも言われるハンセン病患者がいます。

多磨全生園の敷地内には、世界に唯一のらい研究所があり、多磨全生園のセンター化は世界のハンセン病患者に必ず貢献することでしょう。是非そうあって欲しいと、祈る気持

で御座いますが、それだけに治療棟の整備予算がついたことは大きなよろこびでした。

然し、それを喜ぶことが出来ないのが、個室10床の予算です。1日千秋の思いで個室を待っていた80人の肢体不自由者と120人の独身軽症寮の人々に、大きな失望を与えました。私は、自分の身体の一部を切り取られる思いで治療棟8千万の中から、16床を個室にまわすように施設を通し、本省に要請しました。幸い、私達の苦しい立場を理解され、了承されました。

こうした処置に対し、独身軽症寮の人々は理解し、協力してくれましたが、第1センターの人達は激しい口調で、私を非難しました。私は、この人達の非難を軟らげるために、担当の会計課長、それに、センター長、総婦長に折衝する機会を与えました。それが昨日の会合で、午後2時半より4時半まで持たれましたが、その模様について書く勇気がありません。

昨夜の夢は、昼間の会議の延長であり、その結末であり、その破局でありました。

第1センターの人達は、私の処置に激昂し、一部はハンガーストに入りました。それを背景に、寮長達が、私を取り巻き激しくつめ寄りました。「自分達は、年を取っているのだ、これ以上待てない、死んでしまうからだ。死んだ者に、いくら立派な治療棟が出来ても不要である。即時治

療棟を断念し、個室に全部を当てる。若し聞かない場合は、ハンガーストは解かない、お前はあの人達を見殺しにするつもりか。」

私はその中であって、一つの事を考えていました。彼等の要求が正しいのか、それとも不当の要求なのか、私は、多磨全生園のセンター化は、日本のハンセン病患者に必要であるだけではなく、世界の患者にも必要であると信じています。亦、現代に生きる私達が果さなければならない使命でありましょう。現在社会復帰している快復者は、約 3 千人いますが、後遺症の快復者は、交通事故や風邪等で病気になっても、一般病院を利用する事は出来ません。らいの後遺症のために、診療を拒否されてしまうのです。その大部分は全生園を利用しています。地方施設からの治療のための一時転療者も年毎に増えています。これ等の後に残る人達のために、センターは必要なのです。然し、この人達は、治療棟はいらないから個室を造って呉れと、自分の事以外は考えようとしません。それは全く利己心であり、その利己心を貫くために、ハンガーストに突入しているのです。それは、明らかに不当な要求であり、それに屈することは、信仰を曲げることであり、神の義に立たないことでありましょう。彼等のハンガーストよりも、神を恐れなければなりません。

私は彼等の要求を拒否しました。

彼等は激昂し「お前は盲者のくせに、同じ仲間を見殺しにするのか」と口ぐちに罵ります。

その時、私の内に不思議な感情が生まれました。それは神を裏切らなかつたことに対するよろこびが、泉のように湧き出したのです。恐らく殉教者が経験するであろうエクスタシイなのです。

そのうちに、ハンガーストの現場から犠牲者が出たと第 1 報が入りました。このために寮長達は更に激昂し「お前が殺したのだ」と口ぐちに叫びました。しかし、私は心の内で「例え千人が死んでも、私は意志を曲げない」と、自分に言い聞かせました。

この時、園長は緊急幹部会を召集し、ハンガーストを中止させるために、治療棟の建設を断念し、49年度整備予算全額を、個室の整備に当てることを決定し、ストの人達に伝えた旨の報告が寮長達に知らされました。

私を取り巻いていた寮長達と民衆の間に、どっという歓声が上りました。私は心の中で、マタイ福音書 5 章のイエスの言を念じていました。「義のために迫害されてきた人達は、さいわいである。天国は彼等のものである。わたしのために人々が、あなた方をののしり、また迫害し、あなた方に対し偽って様々の悪口と言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜びよろこべ、天において

あなたがたの受ける報いは大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

民衆のどよめきが静まらない中に、第3報が伝えられました。中央委員会は、緊急中央委員会を召集し、中央委員長である私を罷免し、治療棟建設に反対する事、49年度整備予算を全額個室整備に当てる事を要求する決議をしたと言うのです。

民衆の歓声は、再び大きなどよめきとなりました。その中の一人は私に向って「中央委員会の決議を尊重せよ」と言いました。私はそれに応えて言いました。「中央委員会は自治会規約第7条に依って、中央委員長に召集権があります。中央委員長の許可なしに召集した中央委員会は違法であり、その決定は総て無効です。」

私の言葉に、寮長達と民衆は激昂し、私をののしりましたが、民衆の中から「彼は人民の敵だ、彼をやっつける！」と叫んだものがありました。それが合図でもあったかのように、私の頭上に石やムチや杖が降って来ました。私は殺される。それまで王者の如く振舞っていた私の心に、死の恐怖がよぎりました。そして私は一瞬にして神の国から、黄泉の国へと転落しました。死を恐怖した時、私は神を見失い、黄泉の国へと落ちて行ったのですが、その恐怖の中で私は叫んだのです。「人殺し、助けて！」その声があまりにも大きく、

生々しかったので眠りから覚めたのでした。

友よ、私がこの夢の中で叫んだ叫び「人殺し助けて」に如何に絶望したか、それを理解出来るでしょう。それは神なきものの絶望者の叫びだからです。私はこの叫びの中に、心の奥底に隠されている自己の不信と罪をあらわに見た思いでした。そして深い絶望に落ちたのです。詩篇22の詩人は告白して言いました。「我が神、我が神、何故わたしを捨てられるのです。何ゆえ遠く離れてわたしを助けず、わたしの嘆きの言葉を聞かないのですか。」

友よ、私が絶望したのは、この詩人の如く絶望の中からも「我が神」と呼びかけることが出来ず、完全に神を見失ったことにあります。黄泉の世界に落ちたことにあります。しかし、こうした絶望的状况の中で、最後に私が見出したのはルカ9章の癩癩の子を持つ父親の告白でした。「我は信ず、我が不信を助け給え」。私はこの父親の告白の背後に十字架を見、絶望の中から僅かに光を見出したのです。私が長々と夢のことを書いたのは、あなたにこのことを伝えたい為でした。どんなに不信仰であっても、罪深い世界に落ちていても「我は信ず、我が不信を助け給え」の背景に十字架を見る限り、私達は絶望の中にあっても絶望者でなく、不信と罪の中にあっても、不信と罪でなく、黄泉の国の中にあっても亡

者ではないのです。

療養通信

代筆のUさんが、右手首骨折で約1年程休み、再び代筆の労を取って下さるようになりました。その事は本誌に書きましたが、唯一度の口述筆記で、右手関節炎で再び代筆が不可能になりました。1年近くギプスをかけていたために指が効かなくなり、ペンを持つことが出来ずゴム紐で、ペンを右手にくくりつけ代筆していたのですが、矢張り無理だったのでしょう。

私は大変、責任を感じ、1度は本誌を休刊することを決意しUさんにお詫び方々、そのことを伝えるために出掛けました。

しかし、ふとしたことから代筆の協力者が現われ、休刊することなく発行を続けることになりました。

Uさんの代筆不可能となった時、他にも代筆の協力者が二、三現われ、今更ながら本誌の熱心な読者のあることを知らされました。過去13年間本誌が発行を続けることが出来たのは、こうした協力者と、読者の祈りに支えられて来たためでしょう。神、ゆるし給わば、今後も発行を続けることになるでしょう。

「或る友へ」の中で、第1センターの事を書きましたが、之はあくまで私の見た夢であり、個室を強く望んでいる人達も、私の考えに不承不承

従う方向に向っていますので、ご心配なさらないで下さい。

1月は50年度の予算編成で迎えることになり、全患協はそれに呼応し、行動をくみましたので、正月なしの年を迎えました。全患協本部が全生園にあるため、多磨支部患者自治会は、基地支部として、本部と行動を組むため忙しい新年となった訳です。今年の自治活動を象徴しているかのような新年でした。

私は「神の言を喰う」にも書いたように、思い切った自治会業務の改革を断行し、聖書に集中したいと思っています。その事は私に、自治活動をさせる秘訣なのです。私から聖書と祈りを取ってしまったならば全くの凡人と化し、自治活動の能力も失ってしまうでしょう。

新年に当り読者から多くの祝詞を頂きました。紙上で厚く御礼申し上げます。又クリスマスの祝詞を頂きましたことも併せて御礼申し上げます。私は本誌をクリスマスの祝詞、新年の祝詞として送っているつもりなので、読者の方はご理解頂きたいと思います。そして本誌を送っていない者に限り年賀状を差上げることに致しております。